

信州大学博士課程教育リーディングプログラム
ファイバールネッサンスを先導する
グローバルリーダーの養成

外部評価報告書 (2020年度)



目次

1. 外部評価実施概要
 - 1.1 自己点検評価書による書面審査
 - 1.2 委員会評価参加者
 - 1.3 配布資料(一覧)
2. 事業評価シートによる委員の評価
3. 外部評価を受けて
4. 外部評価資料
 - 事業評価シート(個人)

1. 外部評価実施概要

外部評価委員会日程およびプログラム

コロナ禍のため、以下のとおり書面での実施とした。

1.1 自己点検評価書による書面審査

2020年(令和2年)自己点検評価書に基づいた、評価シートへの記入
審査期間;2020年12月28日(月)~2021年2月1日(月)正午
評価シート提出期限;2021年2月1日(月)正午

外部評価の内容:

- ① プログラム実施体制
- ② 学生の受け入れ状況
- ③ 教育内容および方法
- ④ 教育の質保証

1.2 委員会評価参加者

【外部評価委員】(敬称略)

永澤 剛(経済産業省製造産業局生活製品課長)

富吉 賢一(日本化学繊維協会 専任副会長)

堤 理(炭素繊維協会 技術委員)

土谷 英夫(日本不織布協会)

大塚 真二(一般社団法人日本染色協会)

松原 富夫(一般社団法人日本繊維技術士センター 理事・教育活動委員長)

岩田 忠久(一般社団法人繊維学会 副会長)

1.3 配布資料(一覧/各1部)

1. 外部評価委員会について
2. 外部評価委員会事業評価シート
3. リーディングプログラム自己点検評価書
4. 【参考資料】2019年度年次報告書

2. 事業評価シートによる委員の評価

書面での実施のため、2020年12月28日に、全委員に本プログラムの自己点検評価報告書および事業評価シート(個人)(資料参照)をメールおよび郵送で送付し、事業評価シート記入を依頼した。以下は各委員から提出のあった事業評価シートをまとめたものである。評価の対象期間は、前回の自己点検評価書発行後である2020年1月から2020年12月とし、委員には、A(非常に優れている)、B+(優れている)、B(普通)、B-(やや努力が必要)、C(非常に努力が必要)の5段階での評価をお願いした。また今年度は書面での実施のため、プログラム責任者からの実施状況の説明・質疑応答・学生との意見交換・評価のまとめは行わず、各委員からの個別の評価のみを記載する。

総合評価【各委員の評価;A・B・B+・B+・B+・B+】

(1) プログラム実施体制【各委員の評価;A・B・B+・A・B+・B+】

本リーディングプログラムの運営組織が、成果目標に照らして適切なものであること。

観点1 本リーディングプログラムの運営組織が、成果目標に掲げる人材輩出を実現するためにふさわしい実施体制となっているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

- | | |
|-----------|--|
| A | プログラム発足当初の理念を実現する運営体制になっている。
補助金終了の中でも、様々な改善が継続されてる。
目標人材の輩出評価は、①企業、②修了生の継続的外部評価を待ちたい。 |
| B | 国庫補助がなくなったのちも、運営体制が維持されている。学生から奨励金の減額による影響を懸念する声もある一方、奨励金以外の支援措置に対する高評価もあり、全体としては、適切な運営組織が構築されていると評価できる。 |
| B+ | 文科省の補助が2019年度をもって終了したが、2020年度も引き続き、これまでと同等の指導運営体制を維持していることは評価できる。今後も運営に支障が生じないよう、基金への寄付や共同研究による資金獲得などに期待したい。 |
| A | 多くの研究室が参画し、学生を多面的に教育している点は高く評価できる。 |
| B+ | 文科省の補助金打ち切り後も自助努力によりプログラムを継続されていることは大いに評価される。今後も継続し社会は求める人材の育成に励んで欲しい。 |
| B+ | 先生方のご尽力は理解された。但し、昨年来懸念の「国庫補助が無くなった後」の体制 |

について、特定基金の設立のみならず、更なる企業への働き掛けが必要ではないだろうか。

B+ 文科省の補助金終了後も改善も進め、組織運営は適切な実施体制となるも、予算減少に伴う寄付など対策の効果は不十分、更なる改善が必要。

(2) 学生の受け入れ状況 [各委員の評価; B+・B-・B-・B+・B・B+・B]

履修生選抜の基本方針が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されていること。

観点 2 優秀な学生を獲得するための広報活動が行われ、履修生選抜の基本方針に沿って適切な学生の受け入れが実施されているか。

【委員の個人評価・コメント】

B+ ● 広報活動は十分と考えるが、外部要因(コロナ禍、補助金終了)のため、採用実績が無い。

● 選抜方針は明確だが、目下の壁を乗り越える更なる具体的選抜手段を見極めたい。

B- 今年度(応募なし)、来年度(一次募集応募なし)の募集状況はプログラムの存続にかかわる懸念があり、適切な学生の受け入れが行われているとは言い難い。DX の社会実装が最重点とされる中、社会に有用な人材育成を目指す本プログラムでは、オンライン説明会の開催を始め学生募集においてもオンライン活用等による更なる改革を期待したい。

B- 文科省の補助が終了したことに伴い、新規履修生への奨励金が廃止されたことなども影響し、新たな履修生の受入に至っていない状況である。プログラムの魅力を伝えるコンテンツや SNS の活用など関心を高める取組を期待したい。

B+ 日本人が 12 名、留学生が 13 名と非常にバランスが良い。男女の比率がわからないので、可能であれば資料に追加してもらおうと良い。留学生に関してはアジアが多いが、これはこのプログラムに限らず、日本のどの大学でも見られる現象である。しかし、欧米からがもう少し増えると良いと思われる。

B 文科省の補助金打ち切り後も自助努力によりプログラムを継続されていることは大いに評価される。今後も継続し社会は求める人材の育成に励んで欲しい。

B+ このコロナ禍で大々的な広報活動が難しい中、メール並びにウェブページでの活動になったことは致し方ないことである。その為、1 次募集者がいなかったことも理解出来る。引き続き 2 次募集に期待したい。

B+ 経済支援の減少に伴うことであろうが、海外への広報活動の取りやめ、一次募集への受験者がなかったことなど勘案すれば、相当な対策が必要。グローバルリーダー養成講座としては留学生も必要。

(3) 教育内容および方法 [各委員の評価;A・B+・B+・B+・B+・B+・A]

教育内容およびその方法が成果目標に掲げる人材輩出を実現するためにふさわしいものであり、適切に行われていること。

観点 3-1 リーディングプログラムカリキュラムが適切なものであるかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

- A** プログラム発足から6年間、カリキュラムに様々な改良と工夫が加えられてきた。補助金終了の中での、当初理念維持努力を評価する。
ただし、人材輩出に対する評価は、今後の企業側評価および修了生の業績評価に待ちたい。
- B+** カリキュラムはこれまでの経験も踏まえて構成されており、極めて適切と評価。
- B+** ファイバー工学に関する基礎実習や専攻科目、企業との接点を増やし知見を応用するためのインターンシップなど、カリキュラムは適切であると考えます。
- B** 修士の時の必要取得単位数が多い気がする。もう少し実験に時間を割く方がよい。
- B+** 改善の積み重ね、PDCAサイクルが機能しており適切に運営されていると思われる。
- A** これまでの経験を基に改善されたカリキュラムが実行されており、適切なものであると判断する。
- A** 改善を重ねてきたカリキュラムを維持、見直しされ適切。

観点 3-2 カリキュラムが適切に実施されているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

- A** コロナ禍の中でも、軌道修正を実施しながらカリキュラムが実施された。
ただし、新入生不在下での、一部講義の未開講は寂しい限りである。
- B** コロナ禍でインターンシップ等予定通りに実施できないものもあるが、不可抗力であり、その点を割り引いて評価すれば、適切に実施されたと考えてよいと判断する。
- B-** 2020年度は多くの科目がオンライン授業となり、企業インターンシップも実施困難となりオンライン訪問となるなど、非常に制約のある内容となった。感染防止対策を徹

	底した上での実習が再開できることを期待したい。
A	適切である。新型コロナ禍でもよく対応している。
B	新型コロナウイルスの影響が大きく出ていることが感じ取られる。新型コロナの終息は直ぐに達成できるものではなく今後も工夫が必要である。またコロナ後の社会変化にも柔軟に対応できるよう、先手の対応を期待する。
B+	カリキュラムは適切に実施されているが、コロナ禍の影響もあり、起業インターシップでの制約も認められる。共同研究の拡大も含め、その他の方法も模索してほしい。一方、英語力向上の取り組みについては有益であり、今後も継続して頂きたい。
B+	コロナ感染対策上、一部カリキュラムの実施困難、次年度への見送りを余儀なくされたが、代替策などにより、概ね適切に実施。

観点 3-3 学生が常に自己評価を行いながらプログラム目標を実現できるシステムとなっているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

A	学生の自己目標は、QE・SR・海外実習・研究室ローテーション・インターシップを通じた評価指導を受けながら、軌道修正されつつ達成されている。
A	学生の自己評価とメンターの指導の組み合わせが非常に効果的と判断できる。
B	学生は年に3回、自己評価シートを記入し、これをもとにメンター教員と指導教員が達成状況を把握し、目標達成に必要な事項をフィードバックするなど指導に活せる体制となっている。
A	自己評価シートから学生の満足度が理解できる。特に、専門以外の分野の幅広い知識の獲得がなかったという学生がなくなったことは高く評価できる。
B	コメントなし
A	自己評価シートについては定量的に目標が見え、且つその進捗が捉えられることから、システムとして機能していると考ええる。
A	改善された自己評価シートをもとに、教員の支援や各種評価での学生へのフィードバックなどを経て、プログラムの目標達成を具体時、継続的に把握、実現できるシステムとなっている。

観点 3-4 教育研究環境が適切なものとなっているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

A	履修生の居室、主研究室の机、メンターとの面談などの配慮を評価する。
B	コロナ禍でキャンパス入構が制限される中、できる限りの対応を取っていると評価できる。
B	所属する研究室を中心に実験研究環境は整備されており、また、年に数回、メンター教員とのオンライン面談も実施されるなど、ハード面・ソフト面で特に問題はないと考える。
A	適切である。
B	コメントなし
B+	居室の準備もなされ、グループ間のコミュニケーションを図るべく対応頂いてはいるが、このコロナ禍ではその他のコミュニケーション方法も積極的に活用願いたい。
B+	本年度はコロナ対策のため学生の自主活動、グループディスカッションが困難であったが、ほかの設備は継続的に充実されており教育環境は適切。

観点 3-5 学生への支援体制が適切に行われているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

A	プログラム発足以来の支援体制(①奨励金、②財政、③教育、④メンタル、⑤就職)が充実している。
B+	国庫補助の終了に伴う奨励金の減額はあったが、就職支援策として新たな取組を始めるなど、制約条件の中で適切な支援が行われていると評価できる。
B	文部科学省の補助金終了後も奨励金など経済的支援は続けており、また、就職支援のための企業とのオンラインマッチング会も開催しているとのことだが、2020年度は支援の頻度が減ったことがうかがえる。引き続き、効果的な就職支援などを期待したい。
A	適切である。
B+	丁寧に支援されていると判断します。
A	留学生に対する信州大学独自の就職支援活動がなされた点、評価出来る。またこのコロナ禍、そのアクセスが制限される中で ZOOM によるコミュニケーションがなされたことも良い点ではある。
A	奨学金減額、コロナ対策上、女性メンターや企業メンターによる学生面談はできなかったものの、他の財政、教育、就職支援体制は適切

観点 3-6 学生が満足するプログラムとなっているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

- | | |
|-----------|---|
| A | 学生へのアンケートの結果から、本プログラムへの学生の満足度を感じる。
特に、自己能力成長への彼らの満足の高さは、リーディングの理念の達成とを感じる。
ただし、多様な交流(異分野の学生・企業人などとの)の密度アップへの期待を感じる。
本アンケートから、本プログラムへ後輩達を勧誘する在学生の意欲不足は感じない。 |
| B | 総じて学生の評価は高いが、コロナ禍の影響で今年度の活動に対する評価がかなり下がっている。コロナ禍で工夫して対応した点が学生にあまり高く評価されていない点
が気になる。 |
| B+ | 学生へのアンケート調査によれば、プログラムへの満足度は非常に高いものとなっ
ており評価できる。 |
| B+ | 後輩にもこのプログラムを勧めたいという学生の 9%(25 人中 2 名)がそう思わ
ないとある。この理由を聞き、改善を考えることが必要である。しかし、9 割が勧めた
いと考えていることは高く評価できる。 |
| B+ | 学生さんの満足度は高いと思います。 |
| B+ | ZOOM の活用等により、学生とのコミュニケーションを図るべく努力されているが、
この様な制限下であることから、他の情報ツールも活用し、更なるコミュニケーション
を目指して頂きたい。 |
| A | 学生のアンケート結果も概ね満足、メンターや指導員による学生への対応も適切。 |

(4) 教育の質保証 [各委員の評価;B+・B+・B+・B+・B・B+・A]

教育の質の保証が適切であること。

観点 4-1 学位授与の基準が適切であるかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

- | | |
|-----------|--|
| A | 設立理念にマッチした本プログラムの学位基準およびプログラム修了判定は、適切と
判断する。 |
| B+ | 適切と考える。 |
| B+ | 通常の博士課程における基準(論文数)に加えて、TOEIC800 点相当の英語力や能
力審査を条件とするなど、グローバル人材の育成に相応しい内容であると評価でき
る。 |
| B+ | 修士の座学の単位が多い気がする。 |

B	コメントなし
A	「履修方法及び進級、修了要件」並びに「プログラム修了判定に関する実施要領」も定められており、適切と考える。
A	14名の修了者を輩出、企業の研究部門、大学で活躍中、基準は適切

観点 4-2 質の保証の基準が社会のニーズに照らして適切かどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B+	<ul style="list-style-type: none"> ● 修了生の質の保証は、短期間判断でなく十分なn数を確認しての判断が必要である。 ● 社会ニーズは時代とともに変化する。企業および卒業生からの継続的聞き取りに期待する。
B+	● 外部評価委員を始め、本プログラムに関わる企業関係者、などの意見を聞きながら基準の見直しを行っており、適切なものと評価できる。
B+	産学連携委員が、招へいした企業経営者や就職先企業へのアンケート調査、意見交換により、社会ニーズの把握に努めている。
B	3社からしか回答がないが、その内容を見ると、少し社会(企業)が求めている基準に達していない場合もあると考えられる。しかし、これはたまたまその会社に就職した学生がそのような評価を受けただけであることも考えられることから、もう少しアンケートの回答数を増やす必要がある。
B-	修了生に対する就職先企業からの満足度で、満足よりも不満足の方が多いのが気になる。個人の資質の問題なのか、教育の質の問題なのか検証が必要だと思う。
B+	本プログラムの学生に期待される点として、繊維に特化した知識並びに能力を境に早急に展開できるという点と理解した場合、ある程度は理解できる。但し、今後の卒業生の活動如何で、基準の見直しを含め、ご検討願いたい。
B+	事例は少ないが修了者の就職先からの調査結果には評価にバラツキあり、今後も調査の継続と調査結果のプログラムへの反映は重要

観点 4-3 Qualifying Examination の内容が適切であるかまた適切に実施されているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

A	QE の内容と実施に問題は無く、適切に実施されていると判断する。
B+	適切と考える。
B	博士後期課程入学試験に相当する QE は、2020 年度は、受験資格(TOEIC650 点

	相当など)を満たす学生に対して、口頭試験がオンラインで実施され、リーダーシップ能力も可否の判断指標になっており、適切であると考えられる。
A	これにより一定以上の質が担保されていると考えられるとともに、足踏みをしている学生の状況をきちんと把握できるので大変よいと思われる。
B	適切だと判断します。
B+	QE の内容は適切と考える。
A	適切に実施されている。リーダーシップに関する質問は着眼力、思考力の評価に有効。

観点 4-4 Systematic Review の内容が適切であるかまた適切に実施されているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

A	SR の内容と実施に問題は無いと評価する。
B+	適切と考える。
B	修士論文審査に相当する SR は、2020 年度も、受験資格(QE 審査合格など)を満たす学生に対して、研究計画・経過の英語による口頭発表や口頭試験が実施される予定である。
A	適切である。
B	適切だと判断します。
B+	SR の内容は適切と考える。
A	適切に実施。

観点 4-5 十分な学生の研究成果が得られているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

A	質量ともに多量多様なカリキュラムをこなす乍ら、論文発表数が増加していることを評価する。プログラム理念の適正さと学生の努力に敬意を表する。 従来の博士課程の学生達との、定量的・定性的な成果比較を見極めたい。
B+	学生の間で成果のレベルに差はあるが、発表論文も増えており、学生の研究成果としては十分なレベルと評価。
B	博士課程の学生が増えたことに伴い、論文発表数も増えているとのことである。個々の研究や論文の評価詳細は不明であるが、活動量は適切であると考えられる。
A	十分に成果が上がっていると認められる。
B	コメントなし

- B+** 研究成果を表す指標として、論文の本数は一つの指標となる。「論文本数/在籍者数」等の形で、定量的な見方が出来る様にも提示願いたい。
- B+** 発表論文は着実に増加。研究論文発表と特許出願は基本へプロセス同様、特許出願可能な論文はないのでしょうか。

観点 4-6 就職先で学生が十分活躍しているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

- B+** まだ少数の学生が、短期間で企業で活躍しているに過ぎない。従って短期間・少人数のアンケートから、正しく正確な活躍状況を評価できない。
今後数年の継続的評価に期待したい。(企業および卒業生の評価)
- B+** 修了生の就職先へのアンケートでは概ね好評価であり、就職後の活躍が認められる。厳しい意見をいただいた企業があったとのことだが、当該指摘については詳細に分析し、今後のカリキュラムや学生の評価、メンターの在り方に活かしていただきたい。
- B+** プログラム修了生は、東レや花王、住友化学といった繊維・化学企業の研究所に就職しており、専門性を活かすことが期待される。就職先への追跡調査では、厳しい意見もあるとのことだが、こうした声もプログラムの改善に活かされることを期待する。
- B-** 3 社中 2 社が「期待したレベルに達していない」とコメントしてきていることは気になる。全体を通して、企業からの評価は厳しめである。企業からのアンケート結果は非常に重要で、企業が何を求めているか、しっかり検討を行うことが必要かと思う。大学は企業の下請けではないが、企業が求めたい人材を正確に把握し、必要と思われることを教育する
- B** 企業風土により優秀な人材でも活かされないこともあれば、逆に普通の学生が能力以上の力を発揮するケースもある。就職指導においては会社の風土など詳細を学生さんに伝えられたら良いですね、そのためには卒業生からの大量な情報収集が必要だと思います。
- B** 今回のアンケート結果からは、未だ本プログラムの特徴を理解できるものではないと考える。引続きフォローが必要ではないか。
- B+** 就職先から厳しい評価の修了生もあるが、プログラムの目標とするコミュニケーション、課題設定、その解決力などで高い評価の修了生もでている。

(5) 所見、その他

本当は、オンラインで学生達と話し合いたかった。

学生達のアンケートおよび発表結果から、本プログラム発足の理念達が達成されているのを実感する。

ただし、文科省の補助金カットおよび昨今のコロナ禍が、本プログラムにも少なからず影響を及ぼしていることを懸念する。

特に新規プログラム応募者が皆無であることに、本プログラムの先行不安を感じる。しかしながら厳しい環境の中でも、先生方・事務局・学生達の三位一体となつてのプログラムへの取り組みへの熱意を感じる。

今後大事なことは、プログラム理念の継続的遵守であり達成努力と思う。そのためには予算減少の中で、或る程度の選択と集中(①優れた少数の信大学生を選抜、②留学生と他大学卒業生を対象から外す、③当初理念の達成)が必要かもしれない。

いずれにしても、本プログラムの真の成功評価は、卒業生と企業の継続的評価を収集していくことと確信する。

企業出身者の一人として、外部評価委員の一人として、本プログラムの理念および学生達の成長ぶりには感銘する。

今後は短サイクルの軌道修正でなく、まさに長期的・俯瞰的視点からのプログラム微調整・および継続的・高密度なマネジメント努力に期待したい。

学生と意見交換する機会がなく、一方的に研究発表のビデオを見るだけであったが、繊維産業全体を俯瞰する立場から見て、興味深い研究テーマが散見されたと思う。プログラムの目的に沿った教育が行われているとみてよいと思う。

コロナ禍でインターンシップ等他者との接触を前提とするカリキュラムの実施が困難を極め、苦勞されたと思うが、特に、年度後半については、オンラインのさらなる活用により少なからずリカバリーが図れたのではないかと感じる。

オンラインの活用については、いわゆるDXに対する取組を精いっぱいやったとの感触が得られなかった点が残念。パンデミックが終息したのちも、例えば、外国の提携大学の特別講義をオンライン化する、海外大学も含めたオンラインによる学生交流など、招へい予算をあまりかけずにプログラムの国際性を高めることもできると思料。また、学生募集についても、他大学に対するオンライン説明会の開催などの工夫も可能。

コメントなし

直接意見交換をしていないので、コメントは控えます。

初めての評価であり、資料を読み返しある程度は理解した上で記入をさせていただきました。間違った解釈や的を外しているコメント等もあると思いますが、その点はご容

赦ください。

何より感心して評価すべき点は文科省の補助金に頼らず自助努力で継続されている点で、この継続こそが技術立国日本の復活には必要だと思えます。特に繊維に関する高等教育を行う場が激減しているなかで、このプログラムの重要性は必ず理解されると思えます。繊維というと時代遅れ斜陽産業などと揶揄されることもありますが、繊維ほどあらゆる産業に貢献しているものはないと自負しております。(繊維産業に携わる者の勝手な思い込みかもしれませんが)グローバル人材を育成するうえで特にお願いをしたいのは「技術者倫理」の重要性です。

プログラム終了後の就職先をみると民間企業が多くなっておりませんが、民間企業では公益確保と会社の利益確保が相反するケースはいくらでもあり、その際に自分の倫理感に基づき行動できる人であって欲しいと思えます。(時々自分でも迷うケースがあり苦しんでいます。)カリキュラムでは選択科目の共通部分に「技術者倫理」がありますが、これを選択されなかった学生さんにも是非とも技術者倫理の大切さをご指導ください。海外では日本以上に重要なテーマとなりますので。

コメントなし

学生の毎年の中間発表などで見られる研究成果の進化や様々な成長、一方で、就職先からの高い評価を受ける修了生や起業する修了生などを輩出しているなど実績を考慮すると、多角的に検討、改善された本プログラムはグローバルリーダー育成コースとして非常に有効なシステムとして完成されてきた実感しています。

しかし、文科省の補助金支援終了に伴い、学生への学費支援も減少、規模の縮小などプログラムの変更はやむを得ないとは思いますが、留学生募集をしないとか、本年度第一次募集に受験者がいなかったなどを勘案すると信州大学として引き継いだ本プログラムの今後の継続性を危惧しています。学生の応募者がなければ折角築き上げたプログラムの存続は望めません。

一方で、学生の関心事、心配はもちろんプログラム内容ですが、主に経済的支援、就職などが挙げられています。

修了生が就職するであろう企業などへも本プログラムへの広報活動をさらに深め、本プログラムの有効性をご理解いただいた企業などからの支援体制の構築も必要かと思えます。

例えば修了生を受け入れ、修了生を高く評価している企業、あるいは、インターンシップ先で学生を高く評価している企業、あるいはその他の企業などから、それら企業などに就職することを前提に、個々の現役の学生に奨学金で支援をする制度など、しば

らくは、これまでの文科省に代わる得る何らかの学生への支援体制も必要かと思いま
す。

受験応募者がしやすい仕組みづくりに更なる工夫も必要と思います。

3. 外部評価を受けて

2020 年度外部評価を受けて

プログラムコーディネーター 下坂 誠

文部科学省補助金が終了したことで、信州大学独自の予算によりプログラムの運営が行われた最初の年である2020年度の外部評価委員会では、委員から、「限られた予算の中で、これまで指摘された意見をプログラム改善に活かし、ファイバー分野で活躍する修了生の輩出に努力している」ことに対して高い評価が与えられた。しかし、同時に、縮小された予算内でのプログラム運営に対して強い懸念も示された。新たに委員からいただいた意見を参考に本プログラムがさらに良くなるよう、引き続き努力を続けるつもりである。

1. プログラム実施体制

外部評価委員から「補助金終了の中でも、様々な改善が継続されている」、「自助努力によりプログラムを継続されていることは大いに評価」、「多くの研究室が参画し、学生を多面的に教育している点は高く評価」など、これまで改善を続けてきたプログラムの実施体制に対する高い評価があった。こうした評価と共に、プログラム運営予算に対して「特定基金の設立のみならず、更なる企業への働き掛けが必要ではないだろうか」、「予算減少に伴う寄付など対策の効果は不十分、更なる改善が必要」という意見をいただいた。

プログラムに所属する学生がいる限りは、「さらなる企業への働きかけ」を含めて必要な運営資金の確保に努力したい。

2. 学生の受け入れ状況

優秀な学生獲得に向けた広報活動と学生の受け入れ状況については、「コロナ禍で大々的な広報活動が難しかったことは理解するが、今年度応募なし、来年度応募無の募集状況はプログラムの存続にかかわる懸念があり、適切な学生の受け入れが行われているとは言い難い」、そのため「オンライン説明会」「SNS の活用」など「相当な対策が必要」という厳しい意見をいただいた。また、海外大学を対象に募集を行わないことに関して「グローバルリーダー養成」のためには「留学生も必要」という意見があった。さらに、応募者がいない主な理由として奨励金がないことが考えられる点に対して、「学生を高く評価している企業、あるいはその他の企業などから、それら企業などに就職することを前提に、個々の現役の学生に奨学金で支援をする制度など、これまでの文科省に代わり得る何らかの学生への支援体制も必要」という助言があった。

今年度および来年度の応募者がいない点は、委員から指摘があったようにプログラムの存続に関係している。この点に関しては、例えば、これまでのリーディングプログラムの成果を来年度から開始される信

州大学の新たな博士プロジェクトに取り込み、リーディングプログラムとしての学生募集を行わないことなども含めて、今後のプログラムのあり方を根本的に見直す必要があると考えている。この見直しの中で「オンライン説明会」、「SNS の活用」、「留学生」についても検討するようにしたい。新たな博士プロジェクトには、企業に就職することを前提に、学生に奨学金を出す制度もあるので、評価委員からの助言に沿うこともできると考えている。

3. 教育内容および方法

委員からカリキュラムに関して適切と評価された反面、「修士の時の必要取得単位数が多い気がする。もう少し実験に時間を割く方が良い」という意見があった。これまでカリキュラムの見直しの中で、修士の必要単位数をかなり減らしているのに、さらに減らすことにより、従来の大学院コースと同じものとなり、プログラムが目標とする学生の幅広い知識の獲得が損なわれないかどうかを考慮しながら慎重に検討を加えて行きたい。

また、その実施については、コロナ禍の中でもよく対応しているという評価はあったが、「新生不在下での一部講義の未開講は寂しい」、「多くの科目がオンライン授業となり、非常に制約のある内容となった。感染防止策を徹底した上での実習が再会できることを期待したい」、「コロナ後の社会変化にも柔軟に対応できるよう、先手の対応を期待」など多くの意見をいただいた。本年度に開講されなかった講義は、受講対象となるプログラム学生がいなかったことによるものが主であり、委員から指摘されているように新生がいなかったことに起因している。在籍学生については、可能な限り授業の質の向上を図りたい。また、新生がいけない点については、「学生の受け入れ状況」で述べたように、今後のプログラムのあり方の根本的な見直しの中で対処して行きたい。

学生への支援体制に関しては、「2020 年度は、就職支援の頻度が減ったことがうかがえる。引き続き、効果的な就職支援などを期待したい」という意見があった。昨年度の外部評価委員会においても同様な意見をいただき、プログラムでは、これまで以上に、産学連携委員会委員長による学生との就職個別面談、大学の人材育成センター担当者による個別面談、メンターによる就職相談、就職を希望する企業でのインターンシップの実施等を通して就職活動の支援に努めた。特に、留学生に対する就職支援については、大学本部の留学生就職支援担当者にも協力を依頼した。しかし、コロナ感染防止のため、対面での就職支援が難しかったことで、支援の効率的な実施ができなかったことも事実である。効果的な就職支援ができるようにして行きたい。

学生の満足度については、「コロナ禍の影響で今年度の活動に対する評価がかなり下がっている。コロナ禍で工夫して対応した点が学生にあまり高く評価されていない点が気になる」という意見をいただいた。運営側では、コロナ禍の中で実施が困難となってしまった活動に対して、制約された条件下で最適と思われる代替方法を見つけながら対応してきた。こうした努力が学生に評価されなかったのは残念であるが、今後もコロナ感染防止による制約が続く場合は、さらに学生が満足できる方法を工夫したい。

4. 教育の質保証

プログラムが掲げる質保証の基準が社会のニーズに照らして適切かどうか、および、就職先で修了生が十分に活躍しているかに関して、委員から「もう少しアンケートの回答数を増やす必要がある」「短期間判断でなく十分な数を確認しての判断が必要である」、など少人数のアンケートではその判断がむずかしいという指摘があった。また、「就職先から厳しい意見もあるとのことだが、こうした声もプログラムの改善に活かすことを期待」、「今後の卒業生の活動如何で、基準の見直しを含め、ご検討願いたい」という意見があった。修了生の就職先での活躍状況に対するアンケートは、その評価の信頼性を高めるため就職後1年以上が経過した修了生に対して行っている。まだ修了生が少ないため回答数は多くないが、今後も調査を継続することで回答数を増やしたい。就職先の評価を積み上げて行くことで、さらなる改善点を見出し、それを基に今後のプログラムのあり方の見直しと合わせて質の基準の検討も行いたい。

4. 外部評価資料

5.1 事業評価シート(個人)

信州大学博士課程教育リーディングプログラム
2020年度外部評価委員会
事業評価シート(個人)

対象期間:2020年1月~2020年12月

◎総合評価

[アイテムを選択してください。]

A (非常に優れている) ・B⁺ (優れている) ・B (普通) ・B⁻ (やや努力が必要) ・C (非常に努力が必要)

○評価項目

1. プログラム実施体制

[アイテムを選択してください。]

本リーディングプログラムの運営組織が、成果目標に照らして適切なものであること。

観点1 本リーディングプログラムの運営組織が、成果目標に掲げる人材輩出を実現

するためにふさわしい実施体制となっているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

2. 学生の受入れ状況

[アイテムを選択してください。]

履修生選抜の基本方針が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されていること。

観点 2 優秀な学生を獲得するための広報活動が行われ、履修生選抜の基本方針に沿って適切な学生の受け入れが実施されているか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

3. 教育内容および方法

[アイテムを選択してください。]

教育内容およびその方法が成果目標に掲げる人材輩出を実現するためにふさわしいものであり、適切に行われていること。

観点 3-1 リーディングプログラムカリキュラムが適切なものであるかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-2 カリキュラムが適切に実施されているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-3 学生が常に自己評価を行いながらプログラム目標を実現できるシステムとなっているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-4 教育研究環境が適切なものとなっているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-5 学生への支援体制が適切に行われているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-6 学生が満足するプログラムとなっているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

4. 教育の質保証

[アイテムを選択してください。]

教育の質の保証が適切であること。

観点 4-1 学位授与の基準が適切かどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-2 質の保証の基準が社会のニーズに照らして適切かどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-3 Qualifying Examination の内容が適切であるかまた適切に実施されているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-4 Systematic Review の内容が適切であるかまた適切に実施されているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-5 十分な学生の研究成果が得られているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-6 就職先で学生が十分活躍しているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

○学生との意見交換に対する所見、その他

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

記入者

氏 名 _____